

石見焼関連遺跡調査報告書 2

かみこうはったんばらかまあと
上府八反原窯跡(佐々木窯跡)

—一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI—

2001年3月

浜田工事事務所
教育委員会

序

国土交通省浜田工事事務所においては、活力に満ちた石見地域を目指して、くらしの利便性、安全性、快適性の向上を図り、人や自然にやさしい環境形成にも配慮しつつ、道路整備を進めているところであります。

江津地区においても一般国道9号のバイパスとして江津道路の事業を進めています。この道路は当面、山陰自動車道の機能を併せ持つ道路として活用を図ることとしており、国土の骨格を担う重要な道路でもあります。更に、過疎化が進み、若者の流出に悩むこの地域に活力を吹き込む道路でもあります。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分配慮しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

江津道路においても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同教育委員会や江津市教育委員会の御協力のもとに平成3年度から発掘調査を実施しております。

本報告書は、平成11年度に実施した「上府八反原窯跡（佐々木窯跡）」の調査結果をまとめたものであります。本書が地域の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術および教育のために広く利用されると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへの御理解をいただくことを期待するものであります。

最後に、今回の発掘調査および本書の編集にあたり、御指導御協力いただいた島根県教育委員会ならびに関係各位に対し心より謝意を表すものであります。

平成13年3月

国土交通省中国地方整備局浜田工事事務所

所長 藤井輝夫

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）の委託を受けて、平成5年度から一般国道9号江津道路建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施しておりますが、このたび6冊目となる報告書を刊行する運びとなりました。

この報告書は平成11年度に調査した石見焼生産遺跡である上府八反原窯跡（佐々木窯跡）の調査成果をまとめたものです。「石見焼」は江津市、浜田市を中心に江戸時代の終わり頃から昭和30年代にかけて盛んに生産されていました。「石州瓦」あるいは「石見瓦」と呼ばれる赤瓦や「はんど」と呼ばれる大甕は特に有名で、石見地方だけでなく全国各地に出荷されていました。

今回調査した窯跡は大正時代から昭和40年まで生産が続けられていたものです。調査では、連房式登窯が非常に良好な状態で残されていたことから、その構造を詳しく知ることができました。

本書が、現在も地域の重要な地場産業である石見焼の歴史や埋蔵文化財に対する理解と関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の刊行にあたり国土交通省浜田工事事務所に御尽力を頂きました。また、地元の方々をはじめ浜田市・江津市教育委員会に御協力を頂きました。厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

島根県教育委員会

教育長 山崎 悠雄

例　　言

1. 本書は、建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）の委託を受けて、島根県教育委員会が平成11年度に実施した一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 発掘調査地は下記のとおりである。

上府八反原窯跡（佐々木窯跡）　島根県浜田市上府町イ2219-1ほか

なお、遺跡は、従来「佐々木窯跡」として呼称されていたものだが、本報告をもって名称を「上府八反原窯跡」に変更する。

3. 調査組織は下記のとおりである。

平成11年度 上府八反原窯跡（佐々木窯跡）

〔事務局〕 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

穴道正年（所長）、秋山実（総務課長）、松本岩雄（調査課長）、

今岡宏（総務係長）、渡邊紀子（同主任）、川崎崇（同主事）

〔調査員〕 丹羽野裕（調査第5係長）、間野大丞（同主事）、石倉康民（同教諭兼主事）、
寺尾令（同臨時職員）、服部龍夫（同）、宮本徳昭（同）

〔整理作業員〕 上手文子、鹿森三鈴

平成12年度 上府八反原窯跡（佐々木窯跡）報告書作成

〔事務局〕 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

穴道正年（所長）、内田融（総務課長）、松本岩雄（調査課長）、

今岡宏（総務係長）、渡邊紀子（同主任）、川崎崇（同主事）

〔調査員〕 間野大丞（企画調整係文化財保護主事）、寺尾令（臨時職員）

〔整理作業員〕 石川真由美、神谷登喜美、上手文子、鹿森三鈴、陶山佳代、三上恭子、
柳原順子、

4. 発掘作業（発掘作業員雇用）については、建設省中国地方建設局、島根県教育委員会、（社）中国建設弘済会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から（社）中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人 中国建設弘済会島根支部

布村幹夫（現場事務所長）、小川剛史（技術員）、大内悦子（事務員）

5. 採図で使用した方位は測量法による第Ⅲ座標系の軸方位を示し、レベル高は海拔高を示す。

6. 本書で使用した図のうち、図4～5は（株）アジア航測が作成したものを、図2は建設省浜田工事事務所が作成したものを使用した。また写真図版1上は（株）ワールドが撮影したものを使用した。

7. 本書に掲載した遺物の実測は寺尾と間野が、写真撮影は廣江耕史（埋蔵文化財調査センター第6係長）が行った。執筆は間野が行った。

8. 本書掲載の遺跡出土資料及び実測図、写真などの資料は島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目 次

本文

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 上府八反原窯跡の位置と歴史的環境	2
第3章 調査の概要	4
第4章 小結	8

挿図

図1 上府八反原窯跡の位置	13
図2 上府八反原窯跡調査前地形測量図	14
図3 上府八反原窯跡物原十層堆積図	15
図4 上府八反原窯跡平面図	16
図5 上府八反原窯跡立面図	17
図6 上府八反原窯跡窯内平面・立面図	18
図7 上府八反原窯跡土層断面図	19
図8 上府八反原窯跡改修前遺構実測図	20
図9 上府八反原窯跡大口実測図	20
図10 上府八反原窯跡窯道具実測図	21
図11 上府八反原窯跡窯跡及び周辺出土遺物実測図（1）	22
図12 上府八反原窯跡窯跡及び周辺出土遺物実測図（2）	23
図13 上府八反原窯跡窯跡及び周辺出土遺物実測図（3）	24
図14 上府八反原窯跡窯印資料実測図	24
図15 上府八反原窯跡物原1トレンチ出土遺物実測図（1）	25
図16 上府八反原窯跡物原1トレンチ出土遺物実測図（2）	26
図17 上府八反原窯跡物原1トレンチ出土窯印資料拓影	26
図18 上府八反原窯跡物原2出土遺物実測図（1）	27
図19 上府八反原窯跡物原2出土遺物実測図（2）	28
図20 上府八反原窯跡物原3出土遺物実測図	29
図21 上府八反原窯跡物原3出土窯印資料実測図	30

表

表1 上府八反原窯跡の沿革	3
表2 上府八反原窯跡登録計測一覧表	9
表3 上府八反原窯跡出土遺物の数量表	10
表4 上府八反原窯跡出土遺物の器種別数量グラフ	11

第1章 調査に至る経緯と経過

建設省中国地方建設局により一般国道9号江津道路の建設が計画され、平成元年5月30日付で道路建設予定地内の文化財の有無について照会があった。分布調査は平成2年1月に実施し、上府八反原窯跡を含めて16か所の遺跡が存在することを確認し、平成2年3月9日付で回答した。その後、埋蔵文化財調査は江津市側から進められていき、平成10年度に浜田市内の遺跡も着手する運びとなった。上府八反原窯跡も平成10年度に調査する予定であったが、同じ年に調査した古八幡付近遺跡で予想以上に遺構、遺物が検出されたため、対応できなくなり翌年度にまわすこととなった。浜田工事事務所へは年度当初から調査できるよう用地上の問題の解決をはかるなどの環境整備をお願いした。しかし平成11年度になっても、用地上の問題は解決しておらず調査できないままであった。さらに設計変更が必要となったことで、窯跡の調査範囲は当初の約30m²から約300m²にまで拡がることとなった。この追加部分の用地買収も遅れ、調査可能になったのは12月の初めであった。浜田工事事務所から調査の要請があったが、センターでは現地調査を4月から12月の期間としていることから対応は難しい旨、回答した。しかし浜田工事事務所からは工事の緊急性、特殊性などを理由に、年度内の調査を強く要望された。このため島根県埋蔵文化財調査センターでは極めて異例だが1～2月末までの期間で対応することとした。調査の経過は下記のとおりである。

平成11年12月27日 調査前写真測量

平成12年1月10日 発掘開始 窯周辺の精査、記録作成

1月14日 物原1～下層トレンチ

1月27日 浜田市で18年ぶりの大雪

1月28日 勝田孝幸さんから聞き取り

1月31日 「大正捨一年」銘資料出土

2月2日 物原2トレンチ

2月3日 物原3トレンチ

2月5日 埋文センター職員、浜田市・江津市担当職員による検討会

2月6日・23日 築窯師嶋田俊文氏の調査指導

2月10日 写真測量

2月15日 戸内の製品、窯道具の取り上げ開始

2月21日 各房、作業場の断ち割り開始

3月4日 調査終了

第2章 上府八反原窯跡の位置と歴史的環境

第1節 窯跡の沿革（表1）

上府八反原窯跡は大正時代の終わり頃（1920年代）から昭和40（1965）年まで操業されていた石見焼の窯である。窯跡の沿革を関係者からの聞き取りをもとにまとめると表1のとおりである。経営者の交替やそれにともなう窯の改築、生産品目の大まかな変遷が聞き取りで判明している。窯の操業されていた時期は石見焼の登窯最盛期から衰退期にあたる。石見焼には大きく「瓦」と「丸物」（石見地方で粗陶器のことを呼ぶ）があるが、この窯では丸物が生産されていた。石見焼は江戸時代の終わりから昭和40年頃まで石見地方各地で盛んに作られた。丸物は壺・壺・擂鉢などの炊事用の日常雑器が主だが、なかでも「ハンド」と呼ばれる人壺（水かめ）は有名である。1960年代からのプラスチック・ポリエチレン容器の登場や土水道の普及により石見焼は衰退していく。各所に残された長大な連房式登窯と、廢棄されたたくさんの中古品（物原）が往時を偲ぶ縁となっている。なお、現在でも石見焼の窯元は残っているが、ガス・電気窯を使用するようになり、製品もかつての粗陶器主体から様変わりしている。

第2節 上府地区周辺の窯

上府地区で10か所、宇野地区で8か所の石見焼窯跡が知られている。⁽¹⁾この地区的陶器生産の始まりは明治初年のことで、大正7～8（1918～9）年に盛んになり昭和9（1934）年には13の工場があったとい⁽²⁾う。主な生産品目は「三升、五升、八升、一斗、一斗五升、四斗、五斗迄のつぼやかめ」であった。⁽³⁾現在は三つの窯元以外は全て廃窯となっている。しかし全盛期には、職人以外にも燃料の松の削木や製品を梱包する蔵の生産などで、この地区的多くの人たちが石見焼関連産業に従事していた。⁽⁴⁾窯は当時の国道（現県道田所岡府線）に隣接して築かれている。また窯と前後する時期には山陰線が開通したほか、戦前には下府駅と広島三段駅を結ぶ「広浜線」の建設も計画されていたようである。⁽⁵⁾交通が至便なことが、この地に窯の築かれた理由の一つでもあったのだろう。

註1 石見焼についてはおもに下記の文献を参考にしている。

平田正典『石見粗陶器史考—原点の模索と丸物師の生活史—』1979

江津市文化財協会「石見焼（丸物と瓦）」「石見窯」第13号 1988

松山忠志「角の浦今昔」9～25『山陰中央新報』連載記事 山陰中央新報社1997

2 島根県教育委員会「産業関係遺跡」「生産跡分布調査報告書」Ⅲ 1985

現在は吉田製陶所（上府町）、亀山窯（波子町）、亀甲窯（宇野町）の窯元がある。

3 浜田市誌編纂委員会『浜田市誌』下巻 1973

4 註1 平田正典1979より

5 昭和11（1936）年発行の『石中遊記』（『島根評論』第13巻第6号）には当時の上府村について助役恵美健一からの聞き書きとして次のような記載がある。

「産業としては粗陶器二萬二千圓、米四萬一千圓、蘭八千七百圓の年産あり」

6 トンネルや鉄橋の橋脚は完成していたがレールは敷かれることはなく幻の鉄道に終わった。

浜田市誌編纂委員会『浜田市誌』下巻 1973

7 製品は外ノ浦まで運ばれ、そこで清水某氏が買い付けていたとのことである。

表1 上村八反原黒路の沿革

西暦	利権	空の変遷	浜田のおもなできごと
1920ころ	大正終わり?	・佐々木義一（昭号八反原） 黒の經營始める、黒印六 ・豊郷は江津市在住の鳴出半一、一善親子により 集められる	・関東大震災
1921 1923 1924	大正10 人正12 大正13	・佐々木義一 黒の經營に失敗 ・佐々木公明（昭号菊屋）買取	・朝峰川土（翌14年も1箇）
1926ころ	昭和初	・佐々木義一の弟子、佐々木朝弘が生産 黒印令	・山陰線浜田まで開通
1937 1941 1943	昭和12 昭和16 昭和18	・戦時的企业整備により上村陶器 株式会社設立（社長 佐々木公明） ・上村八反原黒路は存續工場となる ・黒が鳴田一善により改築され人形になる ・下南川本営。旧国道の補修により付近の不良品が 利用される ・黒印施わなくなる	・上府、下府、岡分の三村合併、国府村できる ・浜山地方水害
1945	昭和20		・終戦
1950 1964 1965 1969	昭和25 昭和39 昭和40 平成11	・石垣構造 ・春に最後の窯出しが ・美雪材、難道具の一部は横野製陶所へ ・岡府町と浜田市が合併する	・切妻戦争 ・東京オリンピック ・江津道路建設に先立ち埋蔵文化財調査
1999			註 窯の変遷については佐々木朝弘氏の長男・幸氏と孝幸氏からの聞き取りによる。 浜田のできごとは「浜田市誌」ド巻による。

第3章 調査の概要

はじめに

調査に先立ち行った聞き取り調査により、①窯跡が大正～昭和の時代の遺構であること、②経営者が途中で交替していること、などが判明した（表1）。また伐採後に進行した表面観察により、③連房式登窯が非常に良好な状態で残されていること、④時期ごとに物原（不良品溜まり）の場所が移動し製品の種類が変化している、ことなどが想定された。以上の点から調査は次のような方法で行った。

- ①登窯の構造を詳しく記録する⇒写真測量・ビデオ撮影による遺構の記録、江津市在住の
建築師嶋田俊文氏の調査指導^[4]
②時期ごとの生産品目の変遷を知る⇒窯・物原出土資料の数量化（物原については全量解析ではなくトレンチ調査とする）

第1節 登窯と関連施設について

立地（図2） 登窯は下府川に面した丘陵斜面をL字形にカットして等高線と平行に築いている。窯体は削り出した岩盤の範囲をめいっぱい使って造られている。窯の山側は人ひとりが通れるだけの幅しかない。作業場と道は岩盤を谷側に押し流した造成土の上に築かれている。地山が岩盤質のため湿気が多かったようである。^[5] 登窯以外の関連する施設は聞き取り調査によれば窯の西側の平地と県道を渡ったところにあったようである。

連房式登窯（図4～9） 窯は全長約30mで焼成室は第1～11房にフカセ（素焼き製品を焼成する部屋）がある。窯の規模、構造については表2と写真図版でまとめている。

大口から第5房までは調査区外のため発掘調査は行っていない。大井部は大口と第6房から第11房までは完全に残っている。そのほかの房の天井は、昭和40（1965）年の廃窯の際にアゼ（レンガ）を植野製陶所へ譲渡するために解体している。

【上屋（カマヅヤ）】（写真図版8-3） 聞き取りによれば瓦葺きの礎石建物が第11房までかけていたとのことであり、残された1枚の写真からもその様子がうかがえる。窯を覆っていた瓦が大量に出土し、礎石も一部で確認している。また縫も出土している。

【建築材】 アゼ、大トンバリ、小トンバリの三種類の大きさの異なるどろ乾しレンガが用いられている。どろ乾しレンガは耐火レンガに比べて保熱性に優れていることである。使われているアゼは均一な大きさではないが、これは昭和18（1943）年の改修の際に国府町方面の瓦窯から譲渡されたものを使用しているためである。中には型作りのものが見られたが、これは建築師の手によるものではなく佐々木家で補修用に作ったものである。

【大口（薪の燃焼室）】（図9） 平面は逆三角形で、焚口は中央に1か所付いている。焚口の幅は56cm、高さは74cm以上である。焚口はアゼを積み上げて塞いであった。焚口の奥の床面は土坑状に窪み、その上にはアゼを逆V字状に並べて架けてある。これは湿気が多かったため、薪が直接地面に接しないように工夫したのであろう。大口のほぼ中央にはヌケを立てている。火のめぐりを調整するためであろうか。また内面の壁は全体に強い火を受けてガラス化していた。

【焼成室】 詳しくは表2、写真図版を参照されたい。

【煙出部】(図6・7) 他の焼成室と同様に火格子になっている。「タテブカセ」と呼ばれる構造である。煙山部も改修が行われており当初より約30cm延長されている。フカセの小口部分では横倒しにしたヌケを煙道として使用する工夫もなされていた。

【窯の改修】(図7・8) 現在のハマを断ち割り調査した結果、窯が少なくとも4度改修されていることが分かった。

築造当初 大口～第10房・フカセまで全長も今より短い(現在の10～11房あたりまで)

第1回目 部屋数は変わらないが8～10房までを拡張し窯全体を長くする

このとき現在のフカセ～物原下層を埋めて粘土を貼りスペースを造っている

第2回目 部屋数が10から11に増える

第3回目 第11房とフカセの拡張

第4回目 煙出部の延長、フカセの小口側への拡張(ヌケを煙道として使用)

築造当初の窯の遺構としては第8、9房のハマの下から旧ツキスエ、ハマ、火格子の基底部を検出している。また第11房のハマ下で炭灰やススが付いた窯道具、製品が出土していることから当初の煙出部が第10房あたりにあったことが分かる。そのほか窯の作業場の造成土の下から旧い時期の石壇が検出されたほか、第11房では現在の壁の内側に旧段階の窯の壁を検出している。窯の改修は縱方向への延長だけでなく、谷側に向けての拡張も行なわれたのである。このほかツキスエの付き替えもなされているが改修の時期は不明である。聞き取りによれば昭和18(1943)年に鷲田一善氏が窯を改築し「袋を大きくした」とのことである。前述の「第1回目」とした改修にあたる可能性が高い。第1～4回の改修の全容は窯全体を調査していないので不明である。しかしながら第6・7房と第8房から煙出部との勾配の違うことから、大口から第7房までは改修されていないものと思われる。

登窯以外の施設(図2) 聞き取りでわかった配置は次のようなものである。登窯西側の平地に2階建ての建物が3棟(A)、平屋建物が2棟(B・C)あったらしい。Aの1階にはろくろ場があった。2階からは2枚の道板が登窯の道に向けて架けてあった。Bは細工場でろくろが3基備えられていた。Cは飯場に相当する。^(註6)成形と焼成のための施設がこの空間に配置されていたようである。県道田所府線をわたって西側の平地には土漉し場などの土作業場の施設が置かれていた。

物原(図2・3) 不良品などを廃棄した物原は大きく分けて四つある。聞き取り調査と出土品から物原の場所が、大まかにだが時期ごとに移動していることがわかった。物原3→物原2→物原1下層→物原1・大口付近である。物原1は煙出部の南側の谷を埋め尽くすように捨てられているものである。煙出部のすぐ南側に山に積んでいたものを物原1、そこから下層を物原1トレントとした。物原1は戦後の操業時、下層は戦前の操業にかかるものである。物原2は煙出部から10m離れた標高25～32mの斜面に投棄されているものである。物原3は物原2の南に隣接して標高32～35mに散布している。急斜面であり、調査前に穴の窓印がある製品が採集されていたことから佐々木義一氏の操業時の物原と考えられた。物原2ははっきりしないが佐々木義一氏の代のときのものと推察される。いずれも製品は擂鉢を中心の一風変わったものが多く見られる。このほかにも大口付近にも大量の物原があったが、これはおもに戦後捨てられたものとのことである。時期ごとに見られる物原の場所の移動は土地の所有者とも関連しているのである。佐々木義一氏の時代にわざわ

ざ山の斜面の高いところに運んだのは、下の平地に落ちないように考慮したためであろうか。

第2節 窯道具と製品の概要

窯道具 (図10) ここでは窯積め道具であるヌケ、ハリ以外の道具について触れる。図10の1は漉した陶土を成形できる形まで置くための鉢で、盛鉢と呼ばれる。素焼きの鉢で底部に穴が空けてある。物原2でも出土しているが形態には違いは見られない。2はカマヒバチと呼ばれる鉄製の工具。3はトガワラと呼ばれる窯の小口に用いる素焼きの蓋。トガワラの蓋を閉鎖する際に使うのがカマヒバチである。カマヒバチの基部は袋状になり、ここに長い木製の柄を差し込む。トガワラの丸い穴にひっかけて閉鎖するために先端は「く」字になっている。4は火の見穴の栓である。大きさは様々だが、砲弾形で底面には柄を差し込む穴があいている。5と6は窯内部の温度や釉薬の発色具合を見るための色見である。片口を二つくつつけたような形をしている。窯と周辺から出土した色見には円形の穴が空いている。表面には白色の釉薬がかけられている。なかにはコバルトで数字の3と書いてあるものも見られた。7は鉄斧。燃料の松の割木 (ダイソク) の小割りなどに用いたものか。また物原1からはぼろぼろになるまで使われた軍手も出土している。ほかに「火立て」も原位置に残されていたが、アゼと同じ形状のもの以外に、半円形のものも1点見られた (写真図版6-3)。

製品 出土地点ごとに代表的なもののみ触れることとする。

【窯跡及び周辺出土遺物】 (図11~13) ①房内に残されていた製品 ②作業場、天井に残されていた製品 ③物原1を一括して扱う。図11の1から6は切立て壺、蓋壺。1と2は蓋で1は宝珠つまみが付く。2はつまみが付かない。4と5は輪状つまみの蓋で5の内面に米待釉で八升と書かれている。6は青いコバルトの流しがかかっている。7・8は茶色の米待釉がかかる壺。9はこね鉢で、10は片口鉢である。図12の11と12ははんど。11には黒色の流しがかかる。2の肩部には「め」と呼ばれ大きさの目安とされる波状文が施されている。図13の13は黄白色の釉がかかった高台付きの碗。販売品でなく給食用として学校に寄贈していたものらしい。14から20は素焼き製品である。16は漬け物の重し、17~19は火消し壺で14は植木鉢である。15は蛸壺で底部と側面に1か所ずつ水ぬき用の穴があけられている。戦後に地元国府町の漁業関係者に依頼されて生産されたもので、一部は隠岐にも運ばれていたらしい。水ぬきの穴は生産当初は空けて無かったが、不評であったため空けるように改良したとのことである。

【物原1トレント】 (図15~17) 図15の1から5は切立て壺蓋壺の蓋。1、2はつまみが付かないもので3~5は宝珠状つまみが付く。コバルト釉のかけ方はバラエティに富んでおり、4、5のようなぜいたくな使い方がしてあるものも見られる。また、1には「上府□」の文字が時計回りに書かれている。6は高台付きの碗。7は徳利の胴部。8、9は片口。10は器種不明である。図16は全て素焼き製品である。11は火消し壺の蓋。14は植木鉢で底部に穴が空いている。12と13は器種不明である。15は「さな」と呼ばれるものである。円形を呈し七輪の上に架けて使用する。16は火鉢である。

【物原2】 (図18~19) 1は高台付きの碗で、口縁部に1箇所コバルト釉がかけてある。2は鉢で口縁部にコバルト釉がかかる。3は蓋壺の蓋で、輪状つまみが付く。4は切立て壺。5は紅鉢。□

縁部が逆L字に曲がっている。6は素焼き製品の蓋。ひし形のすかしのがはいっている。7は徳利の完形品。8はすり鉢。図19-9ははんど。肩部には直線文が施され、その上から黒色釉の流しがかかっている。

【物原3】(図20) 他の地点ではほとんど見られない擂鉢が多い。なかには2~3個が重なって溶着したものも出土している。1、2は壺の蓋。1は宝珠つまみが付く。2は渦巻き模様が描かれている。3は小壺か。4は高台付きの碗。5は擂鉢。6は紅鉢。全体は黄色釉で、茶色釉の流しが口縁部から内面にかけてかかる。7も紅鉢で全体は白色釉で口縁から内面に青色釉の流しがかかっている。8はこね鉢。9ははんど。外側に茶色の来待釉がかかり、肩部には四条の直線文の上に黒色の釉がかけられている。口縁上面の来待釉をふきとっている。壺の底部に重ね焼きのためのだんご状の円形の粘土がくっついているものも見られた。こうした資料は物原3でしか出土していない。

【窯印資料】(図14-21、図16-17、図21) 窯の西斜面や大口付近などで数点の「石見守上府」の窯印のある製品が採集された。いずれも壺底に押印されている。戦前の佐々木朝広氏の時代ものである。同種の窯印をもつものは窯内や作業場では出土していない。

図21は物原3で出土した窯印をもつ製品である。いずれも「穴」とあり屋号八反原の佐々木義一氏の時代の製品のようである。10と11は「石見焼穴製」とあるが、書体や字の大きさはそれぞれ異なる。12は「穴」のみである。こうした違いは製品の時期差であろうか。

このほかに物原1下層から出土した図16の17は、底面に「△」の窯印が押されている。さらに底面いっぱいに四行二三字の文字が刻まれている。「大正拾一年一月五日製造 那賀郡有福村□□□□入道」と読める。△はこの窯の経営者が使用した窯印とは違うものであり、どういう経緯でこの物原に混ざっているのかは不明である。

製品と生産品目の変遷 表4から読みとれる変遷は次のとおりである。窯の初代操業者である佐々木義一氏の時代には擂鉢が多く作られており、製品も一風変わった印象を受ける。義一氏の弟子で二代目操業者の佐々木朝広氏の初期の頃には、ながしのあるハンドやコバルト釉が贅沢に使用された白ものが作られている。戦後になると赤ものから白ものへと生産の中心は移り、釉のかけかたも簡素化している。^{註1} 白ものの蓋焼が多く見られるほか、赤ものの壺や植木鉢などが作られている。

註1 染窯傳鷗田氏については下記の文献に詳しい。

平出正典『染窯四代記抄』

2 鷗田俊文氏から焼成窓のアゼの焼け具合から見ても、温気が高く温度の上がりが悪かったのではないかとの御教示を頂いた。

3 昭和40(1965)年春の最終操業のときには第7房まで製品を積め、第8房をフカセとして使用したことである。

4 勾配のきつい窯では煙突は立てないとのことである

5 ツキスエは操業を続けていくと焚窓側にせり出していくためつき替えが必要となる。

また、房の小口の向かって右側の貼り出し部分も築造当初からのものではなく、後で補修のために付設されたものと思われる。

6 昔段、職人は自転車で通っていたが、窯焚きが始まれば1週間泊り込みであったそうである。

7 今回の調査では①窯積めの際の使用状態を調べること ②ヌケ・ハリの出土点数から各房の製品の種類を

- 調べる、ことを目的として房内での出土状態（窯積め状態）及び一点ごとにネケ・ハリの形態・大きさについて記録をとっている。本報告非掲載。
- 8 製品・窯道具は出土地点…物原1～3、物原1トレンチ、各房、作業場、道などごとに点数を数えている。製品については器種、法量ごとに集計している。その成果の一端を表3・4に掲載している。
- 9 蓋壺で見ると戦前の太陽のような模様から3か所に点を付けるものへ変わっている。
- 10 はんどは5斗まで作っていたとのことである。

第4章 小結

今回の調査成果をまとめると次のとおりである。

- ①登窯が非常に良好な状態で残されていたことから築窯技術（特に天井部の構築方法）を知ることができた
- ②窯の4度にわたる改築の痕跡を確認できた
- ③開窯から廃窯までの生産品目の変遷がわかった
- こうした成果は聞き取り調査の結果と発掘調査の知見とを突合せる作業ができたからである。今回、製品や窯積め、窯道具については十分な検討ができていない。今後の課題としたい。
- 現在、登窯の多くは上屋は朽ち草木に埋もれ日々崩壊が進行している。登り窯の保存と活用、築窯技術の伝承について早急に対策を講ずる時期がきている。あわせて関係者からの聞き取り調査なども進めていく必要があろう。

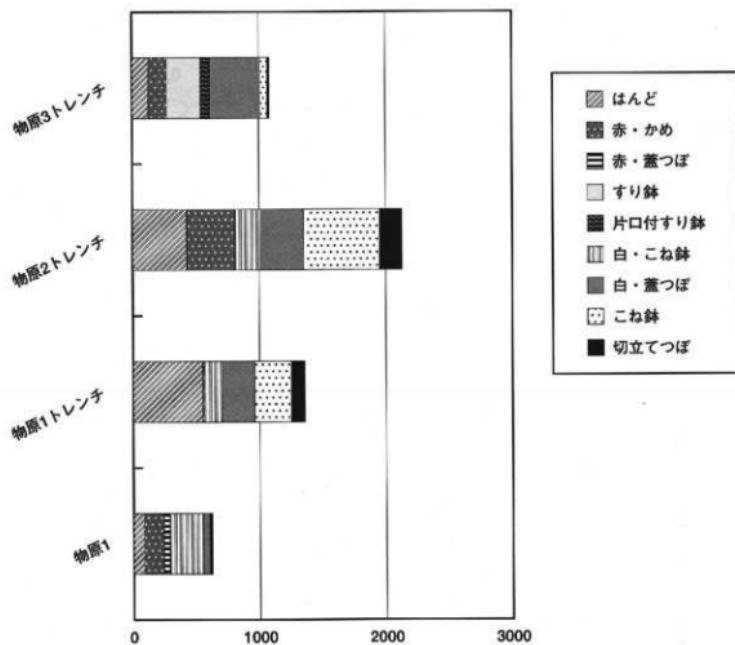
調査中は土地所有者である佐々木征四郎氏、経営者の佐々木朝広氏の御子息である佐々木一幸氏、勝田孝幸氏からは多大な御協力を賜った。また築窯師崎田俊文氏には御多忙のなか2度にわたり現地で御指導いただいた。末筆ながら明記して厚くお礼申し上げる。

表 2 上井八反原跡 登窓計測一覧表

編	奥行(木板)	手前		奥		天井厚		火 帆 子		櫛 間		櫛 高さ		ハヤケ風		勾配		小 口		手 ド サス		高さ 単位:4cm	
		手前	奥	手前	奥	数	奥	幅	高さ	手前	奥	幅	高さ	手前	奥	手前	奥	手前	奥	手前	奥		
人 口	167	135	350	67~95		10	32	12	36	X													
第 1 房	96	318	360	103	21		26	7	25	3													
第 2 房	122	380	385	115	23		23	9	19	3	28	30											
第 3 房	182	400	405	148	27		23	9	27	4	35	60											
第 4 房	198	400	420	180	22	14	28	8	28	5	37	62											
第 5 房	223	460	455	180	23	15	24	10	27	5	33	80											
第 6 房	227	463	495	207	24	16	29	12	27	5	28	86	7.5	25	28	72	165	92	260×350	2265	110		
第 7 房	229	500	215	29	16	33	10	29.5	5	2	21	84	6.5	25.5	24.5	76	160	84	250×250	260	120		
第 8 房	284	509	492	237	25	16	31	11	24	5	2	24	70	6.5	18.5	25.5	67	160	100	255×210	310	115	
第 9 房	246	472	235	23	14	31	10	26	5	2	36	61	4.5	15	27	70	163	99.5	230X	320	75		
第 10 房	230	487	437	221	25	13	30	9	24	4	2	21	50	6	16.5	20	57	145	90	110X110	285	70	
第 11 房	138	416	381	174	23	12	27.5	8	31.5	2	1	20	44	3	19	30	65	147	80	130X100	270	50	
7 才 七	80	358.5	308	119	25	12	23	10	20	三箇跡	11	20								165	110×35	40	

表3 上府八反原窯跡出土遺物の数量表

表4 上府八反原窯跡出土遺物の器種別数量グラフ
物原出土品



	物原1	物原1 トレンチ	物原2 トレンチ	物原3 トレンチ
■ 切立てつぼ	19	107	177	14
□ こね鉢	0	290	601	60
■ 白・蓋つぼ	52	256	339	394
■ 白・こね鉢	263	140	196	4
■ 片口付すり鉢	0	0	1	67
■ すり鉢	0	0	3	269
■ 赤・蓋つぼ	49	2	1	0
■ 赤・かめ	153	11	382	146
■ はんど	86	551	429	128

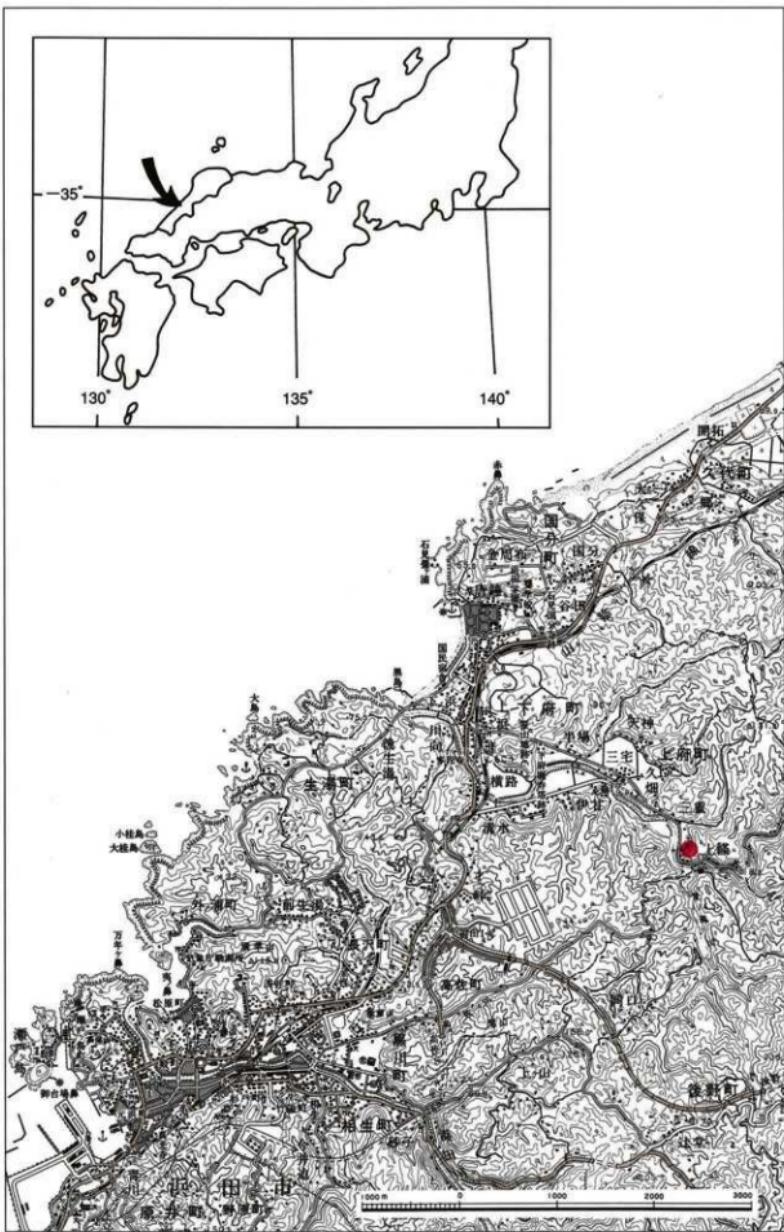


図1 上府八反原窯跡の位置 ($S=1/50,000$)

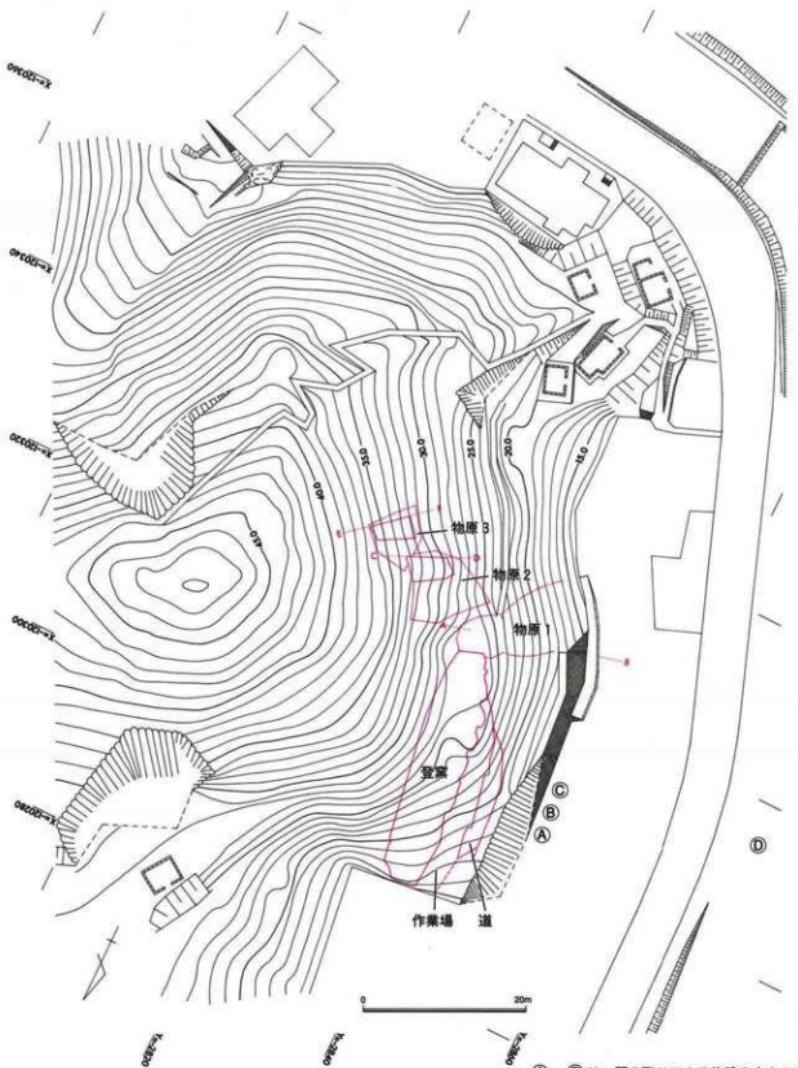


図2 上府八反原窯跡調査前地形測量図 ($S=1/600$ 1 mセンター)

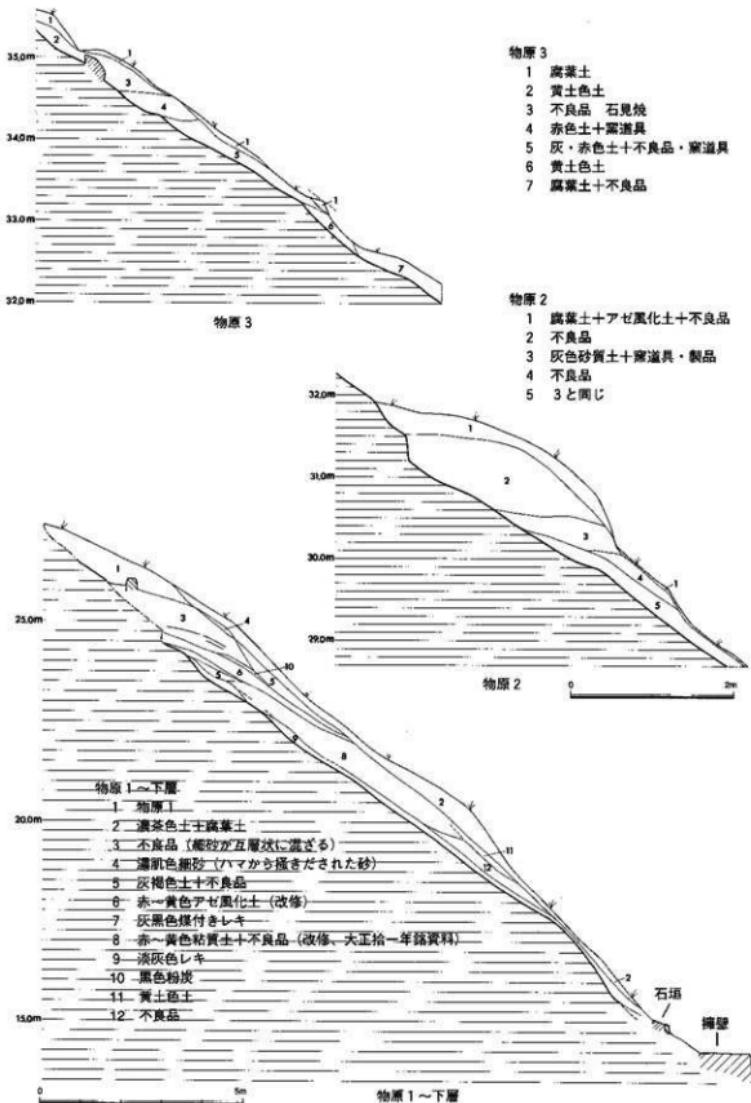


図3 上府八反原窯跡物原土層堆積図 (物原1は $S=1/120$ 2・3は $S=1/80$)

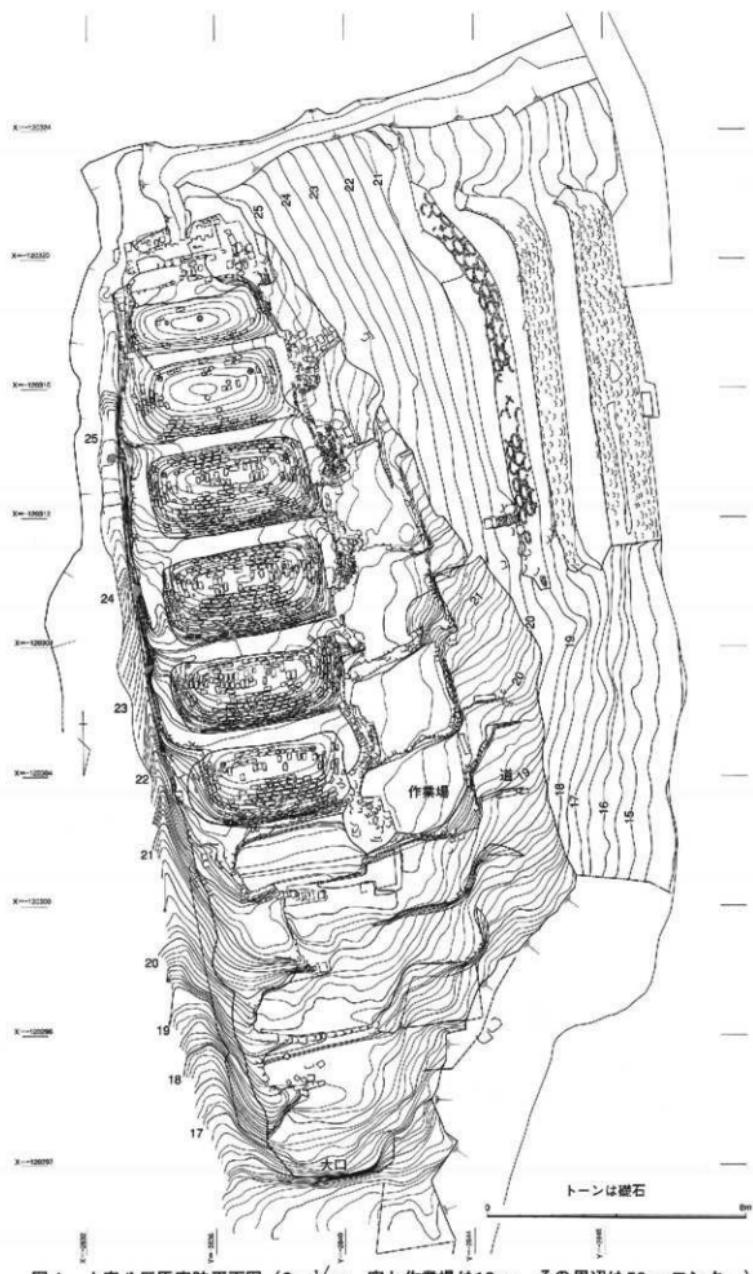


図4 上府八反原窯跡平面図 (S=1/150 窯と作業場は10cm その周辺は50cmセンター)



図5 上府八反原窯跡立面図 ($S=1/150$)

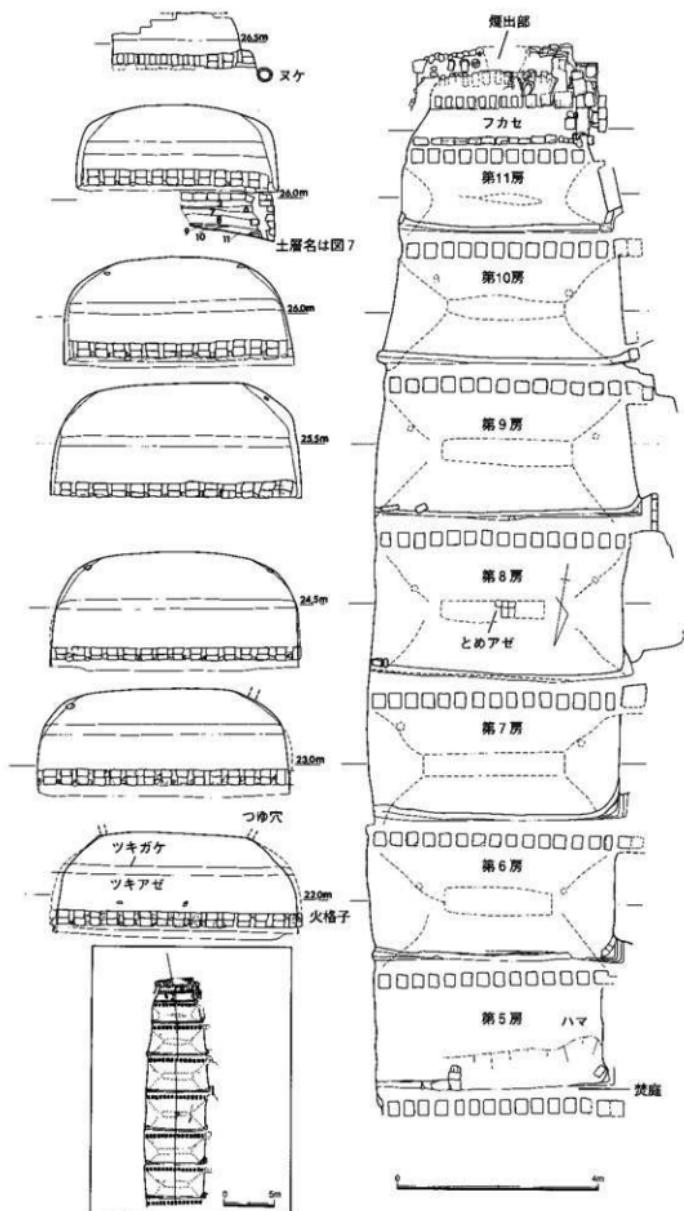


図6 上府八反原窯跡平面・立面図 ($S=1/100$)

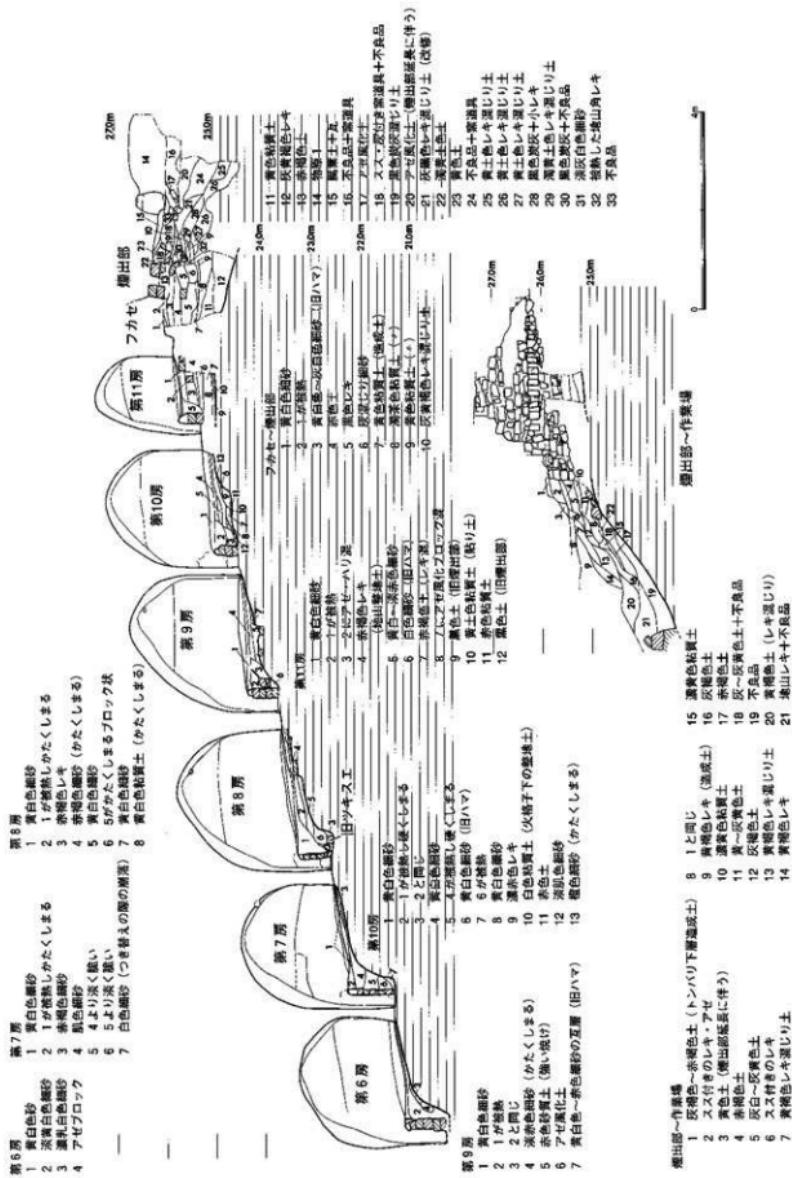


図7 上府八反原窯跡土層断面図 ($S=1/100$)

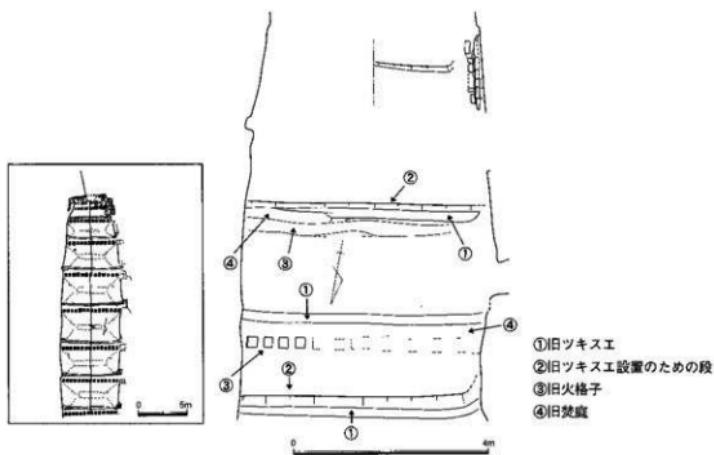


図8 上府八反原窯跡改修前遺構実測図 ($S=1/100$)

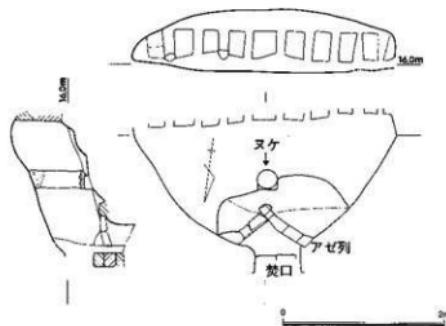


図9 上府八反原窯跡 大口実測図 ($S=1/50$)

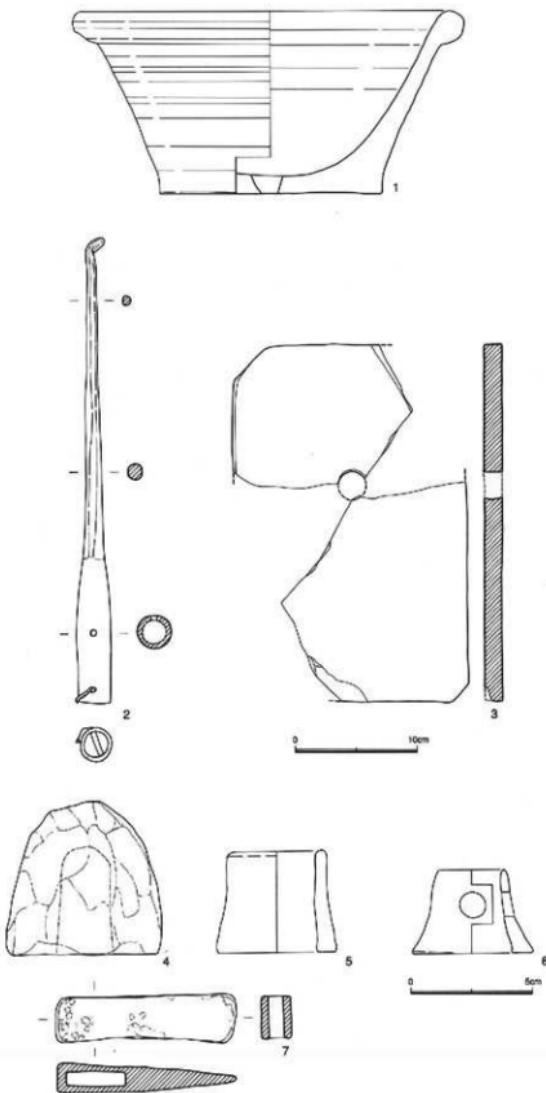


図10 上府八反原窯跡窯道具実測図 (1~3・7 S=1/4 4~6 1/2)

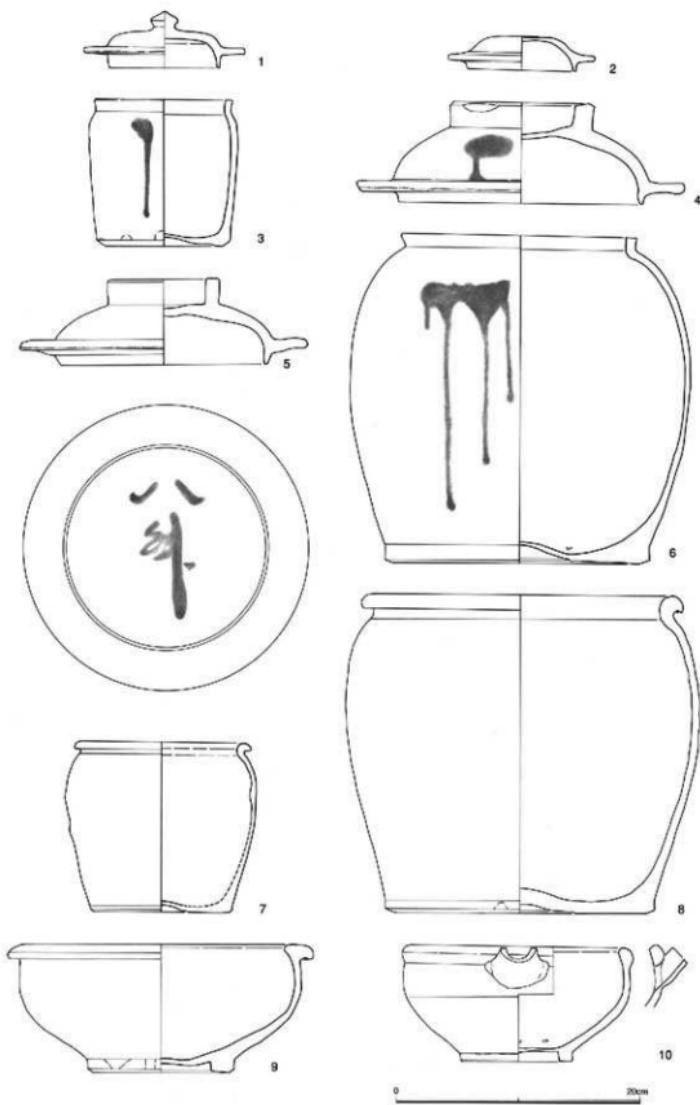
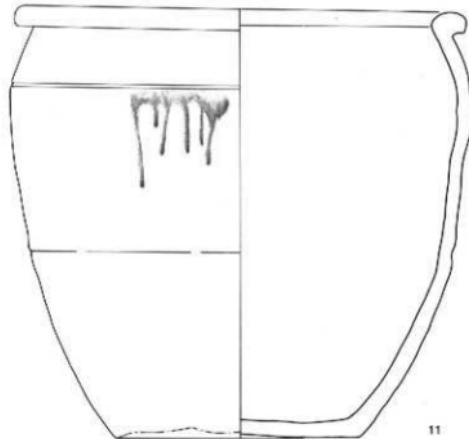
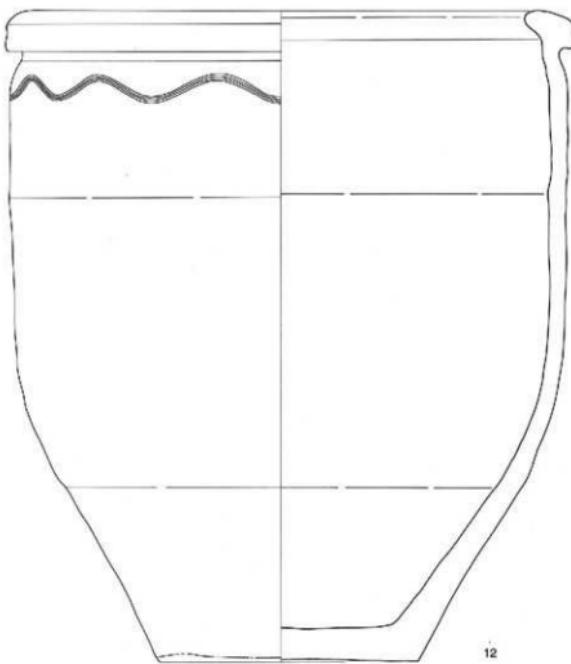


図11 上府八反原窯跡及び周辺出土遺物（1）（S=1/4）



11



12

cm 30cm

図12 上府八反原窯跡窯跡及び周辺出土遺物（2）（S=1/4）

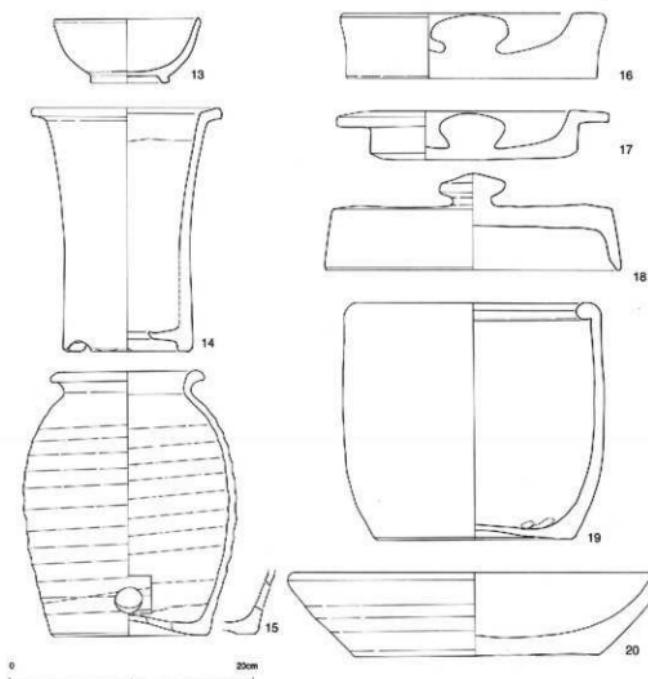


図13 上府八反原窯跡窯跡及び周辺出土遺物実測図（3）（S=1/4）

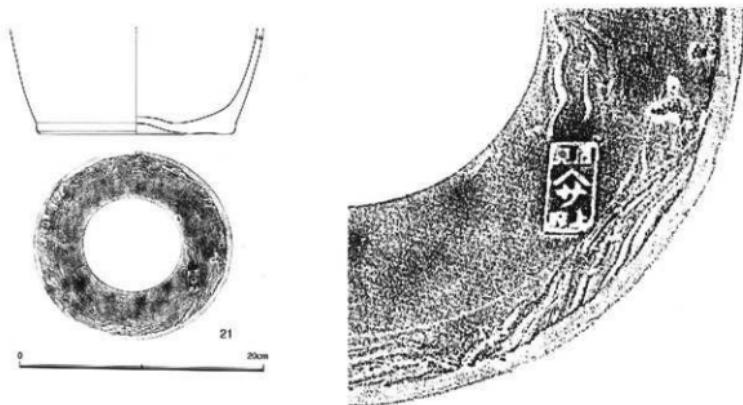


図14 上府八反原窯跡窯跡窯印資料実測図（S=1/4 右の拓影は実寸）

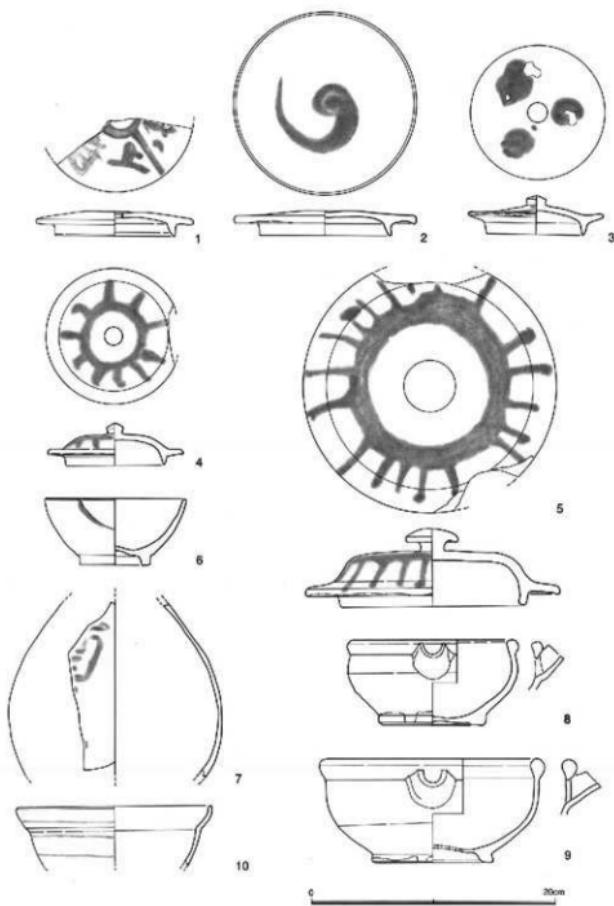


図15 上府八反原窯跡原1トレンチ出土遺物実測図(1) ($S=1/4$)

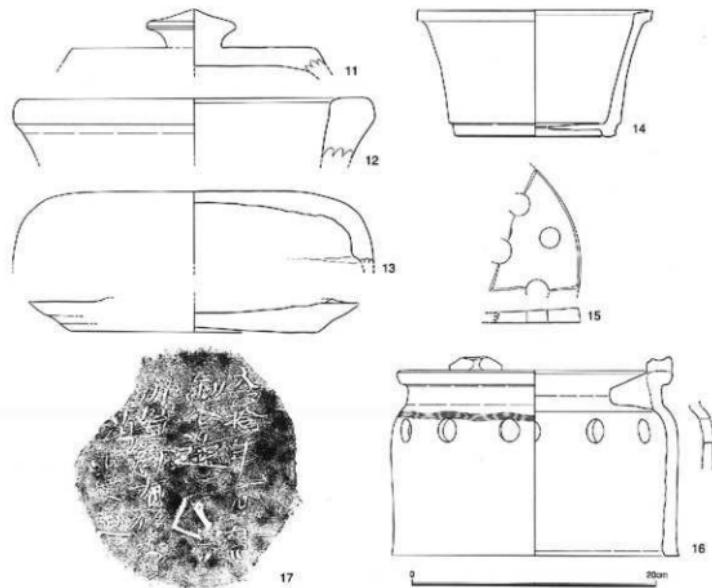


図16 上府八反原窯跡物原1トレンチ出土遺物実測図(2) (S=1/4)



図17 上府八反原窯跡物原1トレンチ出土窯印資料拓影(実寸)

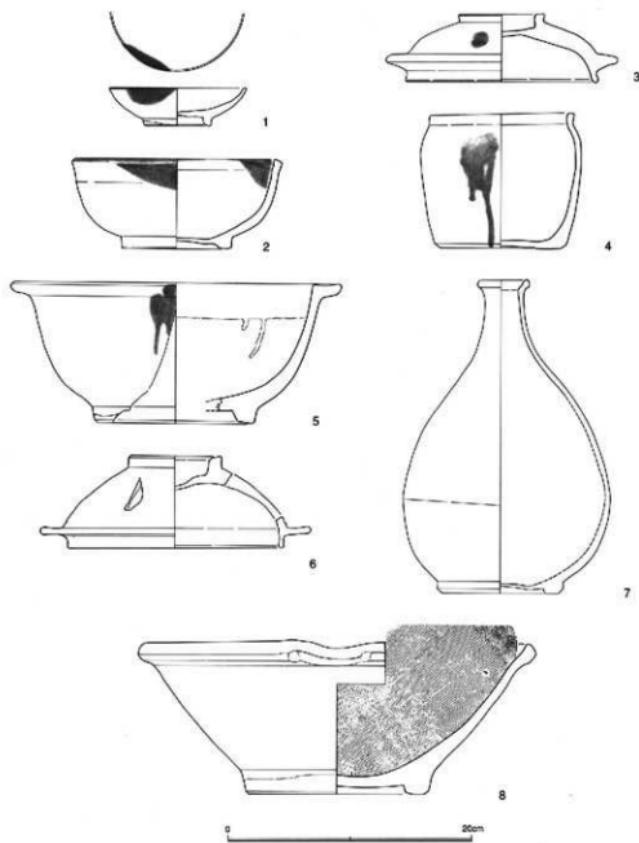


図18 上府八反原窯跡物原2出土遺物実測図(1) ($S=1/4$)

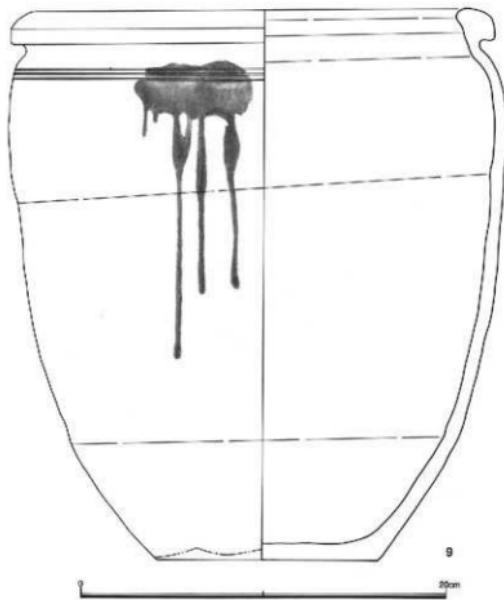


図19 上府八反原窯跡物原2出土遺物実測図(2)(S=1/4)

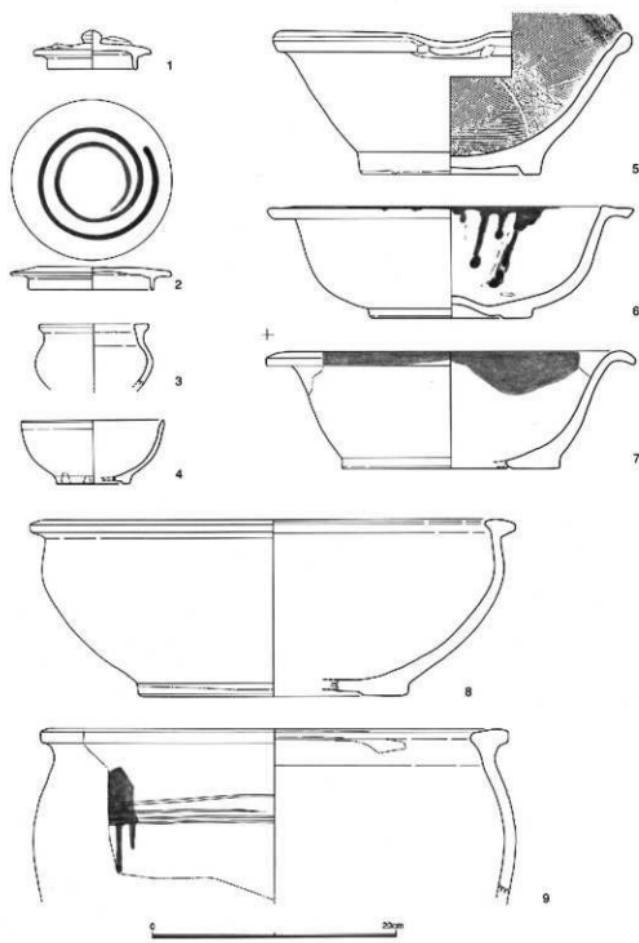
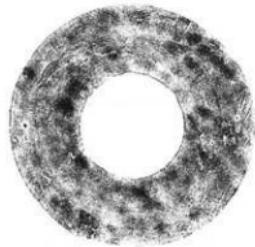
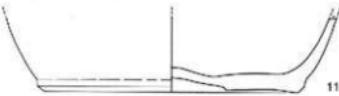


図20 上府八反原窯跡物原3出土遺物実測図 ($S=1/4$)



0 20cm

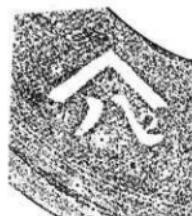


図21 上府八反原窯跡物原3出土窯印資料実測図 ($S = 1/4$ 右の拓影は実寸)

図版 1



上府八反原窯跡全景（西上空から）



上府八反原窯跡全景（西から）

図版2



窯跡近景（調査前 北西から）

伐採の結果、全長約30mの
窯跡がまるまる残っているこ
とが明らかになった。



房の小口（正面から）

焼成室には幅60cm、高さ
1.5~1.6mの出入り口が付い
ている



火の見穴

焼成室には窯内の温度、製
品の焼け具合を見るための穴
が付いている。使用しないと
きは、土製の砲弾型の栓で塞
いでいる

図版3

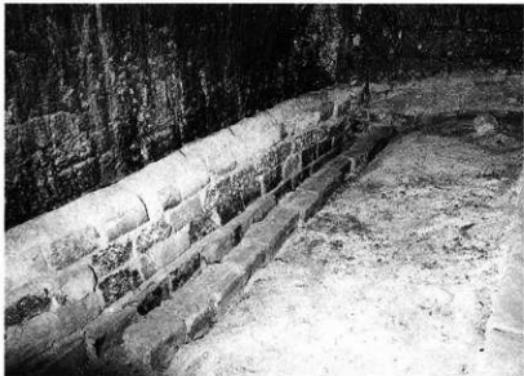
房内の様子

写真の第5房の大きさは幅2.2m、奥行き4.6m、高さ1.8mである。製品を焼くスペースには耐火砂が敷かれており「ハマ」と呼ばれる。



ツキスエ

製品を焼くスペースであるハマと、燃料を焚くスペース「焚庭」の間はアゼ（ドロ乾しレンガ）を数段積み仕切つてある



ツキスエ最上段

最上段は粘土でつき固めてある。内側に円形の当て具の跡が連続して残っている

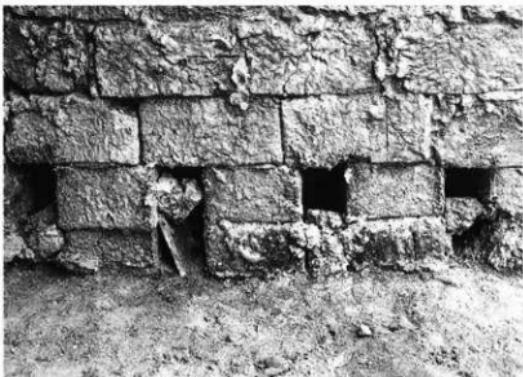


図版 4



壁の構築

窯の構築には大トンبارリ、小トンبارリ、アゼの三種類のドロ乾しレンガが使われる。各房の間の壁には大トンبارリが数段積まれる。



火格子

各間の壁には火格子と呼ばれる焰（煙）が通る穴がある。火格子には小トンبارリが使われる。火格子の間には瓦やアゼの塊などが積めてあり、火のめぐりを調節している。



奥壁

火格子の上には数段の大トンبارリが積まれる。その上にアゼの広い面を横にして一段（ツキガケ）積む。ここから二つの部屋のアーチが分かれていく。

天井は、型枠などは使用せず、竹2本をつっかえ棒にして組んでいく。築窯師嶋田家独特の技術で手練の技である

図版5

天井

天井部のアーチを作っていくとアゼとアゼの間に隙間が生じる。これを埋めるために瓦の破片を詰めてクサビにしている。まわりから飛び出しているアゼがあるが、この高さまで上にコウ土を盛るためである。



つゆ穴

焼成室の天井に窯道具であるハリを埋め込んでいる。これは本焼き前に低温で空焚きして、湿気を抜くために付けられたものである。製品を焼く段階では、写真のようにハリに粘土を詰めて塞いでいる。



煙り出し部

他の部屋と同じように火格子状に作り排煙している。タテブカセと称される構造である。



図版6



焼成室の様子

製品取り出し後の状況である。窯道具や失敗作が散乱する。焼き台であるヌケは焚き庭側の壁に立てかけられている。



窯積めの様子（第9房）

原位置にあると考えられる
窯道具、製品を残した状態。
ヌケと呼ばれる円筒形の焼き
台が並び、そのまわりに壺類
が地積めされている。



火前の窯積み

焚き庭の最前列。小口から
投げ込まれた松の割木が燃え
上がり、最も高温になるところである。ヌケと火立てが交互に並ぶ。火立ての後ろには
ハリが置かれている。

図版7

窯積みの様子（第8房）

この房は最後の操業の頃は「フカセ」と呼ばれる素焼き製品を焼く部屋として使われていた。

火前からハリが並ぶ。小物（壺、植木鉢）を地積めしたことわかる。



窯の改修

ハマの耐火砂を除去し掘り下げた結果、窯は少なくとも4度の改修を行っていることがわかった。写真は第11房の断ち削り後。



作業場の造成。

窯は山の斜面を造成して作った平坦面をめいっぱい利用して構築されている。このため各房前面の作業場は掘削した山のレキを谷に押し流してスペースを確保している。



図版8



道

作業場の前面には窯と平行する道が付いている。最大幅は1.6m。道には横倒しにしたヌケや丸太材で階段を作っている。



石垣

昭和25、26年ごろ斜面が崩れ始めたため、近所の石垣職人が、わずか3日間で作った。2段の石垣の上には「はんど」の中に土を詰めたものを並べて土留めにしている。



操業の様子（昭和30年代撮影）

唯一残されていた写真。窯の上にかけられた上屋（カマヅヤ）や製品を運ぶ職人の姿が生きしい。

図版9



窯跡及び周辺出土遺物

図版10



物原1 レンチ・2・3出土遺物

報告書抄録

フリガナ	イワミヤキカンレンイセキチヨウサホウコク2							
書名	石見焼関連遺跡調査報告2							
副書名	上府八反原窯跡（佐々木窯跡）							
卷次	2							
シリーズ名	一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	6							
編著者名	間野大丞 石倉康民							
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒690-0131 島根県松江市打出町33番地 TEL 0852-36-8608							
発行年月日	西暦 2001年3月30日							
フリガナ 所取遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
カミコウハッタンノバラ 上府八反原 窯跡	シマネケン 島根県 浜田市 カミコウチヨウ 上府町	市町村 32202	遺跡番号 L192	35度 54分 55秒	132度 08分 08秒	19991227 ～ 20000304	300m ²	道路建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
上府八反原 窯跡恵奈	生産	1920年代 (大正時代)頃 ～ 1965 (昭和40)年	登窯1基、 作業場、 道、 石垣	窯道具 はんど、 蓋壺などの 石見焼製品				

石見焼関連遺跡調査報告2

上府八反原窯跡(佐々木窑跡)

一般国道9号川津道路建設予定期内埋蔵文化財発掘調査報告書

2001年3月

発行 烏根県教育委員会

印刷 (株)武水印刷
出雲市江田町208-1